

## ふたつの展覧会余滴より

鍵岡正謹

「中原浩大展 自己模倣」展が終わった。倉敷出身で京芸時代から新鮮な平面絵画や強烈な彫刻《光るミミズ》らで天才と言われた中原は、「絵画」「彫刻」や「美術」を軽やかにも根底的に問い合わせ直す自己言及的「美術」で伝説的な美術家となっていた。▼「自己模倣」展は中原にとり公立美術館での初の大規模展となった。解説なしでは理解不可能な作為提示や会場に棲む作品群は、私たちに現在に於いて「美術」は可能かと迫る。解答など無い超現在の「美術」を観た人たちは何を感受したろうか。言説化自体を拒む／拒まない中原の「提示」に、“男の子の部屋にぶちまけられたオモチャ箱”と微笑みながらも、深刻で誠実な現在の生な美術を投げかけられたアーカイブ的中原展であった。後世に話題となるだろう展覧会は終わった。▼中原展終了前の四日間だけ重複して「極楽へのいざない」展が開催された。平安時代中期から続くとされる来迎会(迎講)を美術の展覧会に仕立てた。▼岡山出身の法然の浄土教の、阿弥陀仏が人びとを極楽浄土に迎えてくれる姿を絵画や彫刻にした美術品や来迎会で使われる仮面や衣裳は極楽への案内<sup>ナビゲーション</sup>の美術である。▼岡山で特別に展示された国宝《地獄草紙》はもと岡山に在った。地獄と極楽がどうやら岡山で口を開けているらしい。岡山の宗教的風土性はよく云われる。▼僕は二上山を背景にした當麻寺の来迎会を子供のときに見て、幻想的光景を鮮やかに記憶している。大学生のときに読売アンデパンダン展を見て、強烈すぎる現在美術は今に鮮烈である。▼美術展は一回こっきりだ。若き日、一期一会の美術展との出合いを大切にしたい。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)

「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

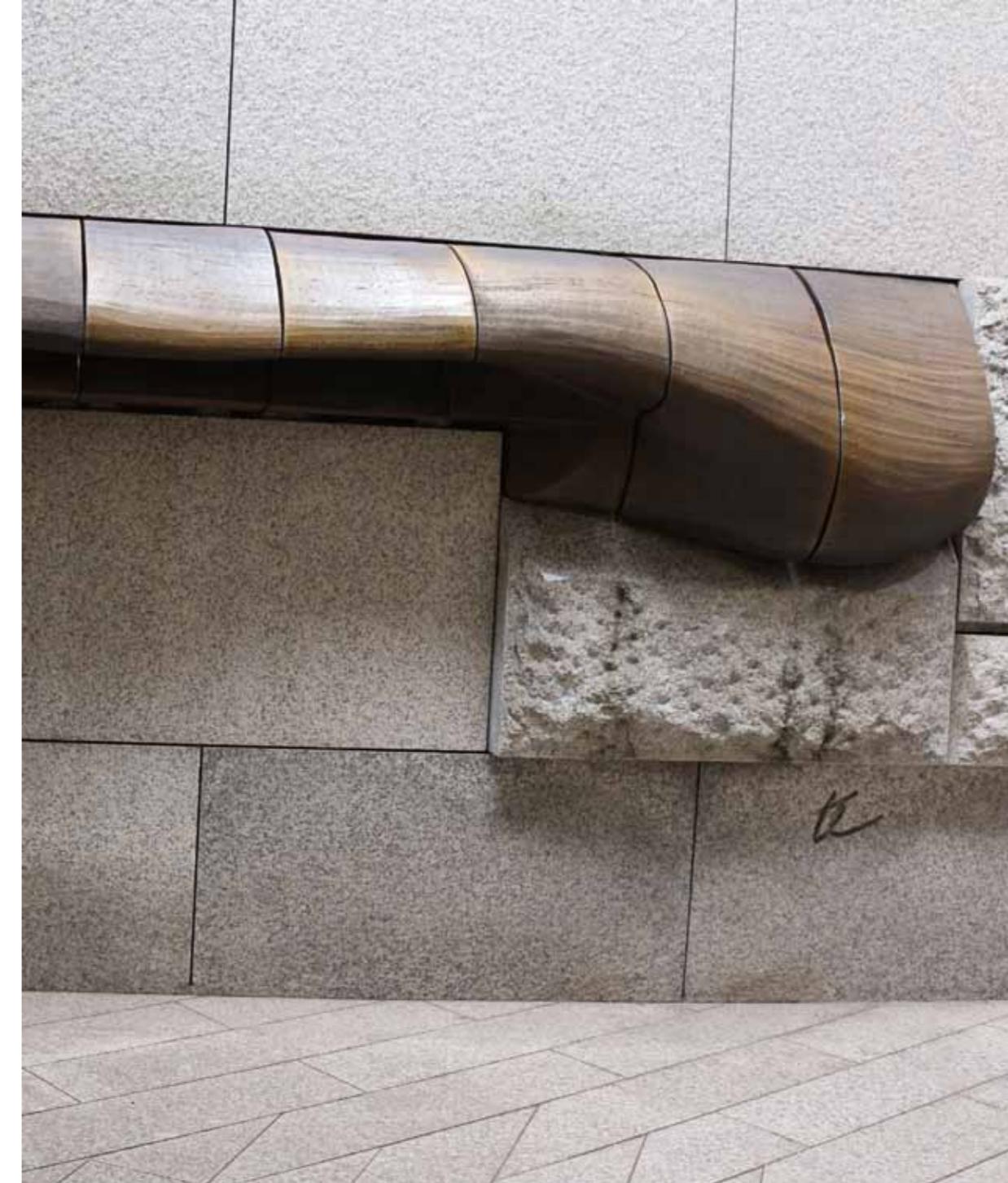
## 編集後記

大山真季

美術館ニュース103号をお届けします。11月から12月上旬にかけては特別展が2本重なり、それにあわせてワークショップや記念講演会などのイベントも多数開催されました。10月からは岡山県立美術館Facebookページも開始し、展覧会やイベントの内容などを中心に情報発信しています。チラシやHPの告知ではイベント内容を詳細に語るのはなかなか難しい部分がありますが、この美術館ニュースやFacebookではわかりやすく写真を交えて隨時ご紹介していますのでぜひチェックしてみて下さい。

## 「美術館の紹介」vol.3

岡山県の都市彫刻としての役割を担う岡山県立美術館。そしてその岡山県立美術館を象徴するものとして制作されたこの彫刻は、館外と館内、また都市と美術館といった、内部と外部をつなぐ「県美の縮図」なのである。



戦前のパリで評価されるまでの歩みをたどる

## 藤田嗣治渡仏100周年記念

レオナール・フジタとパリ 1913-1931

廣瀬就久(学芸員)

戦前にフランスで活動した日本人画家は多いが、藤田嗣治(1886-1968)(図版1)ほど、同時代のフランス画壇で評価された画家はいない。東京美術学校西洋画科を卒業後、1913年に単身でフランスに渡ったが、1920年代初頭より、「乳白色の下地」の上に繊細な墨線を使う独自の作風で、裸婦などを生み出し、称賛を浴びた。モディリアーニやキスリングらとともに、エコール・ド・パリと言われる外国人芸術家として紹介された。

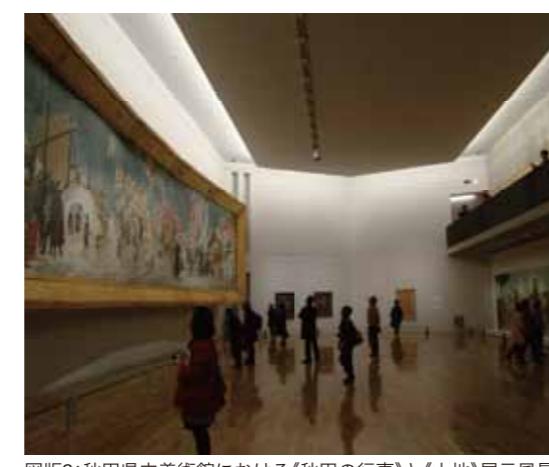
1931年にはパリを出発して中南米に旅行し、1933年には日本に戻る。20年代後半より、壁画の制作に関わっていたが、第2次世界大戦中は戦争画を制作した。戦後はパリに行き、1955年にフランス国籍を取得した。晩年には、ランスの「平和の聖母」礼拝堂のフレスコ画制作を行い、日本に戻らなかった。

藤田嗣治という画家について、戦前のフランスでは、エコール・ド・パリの代表的な画家として評価されたこと、第2次世界大戦中は日本で戦争画を描いていたこと、そして戦後はフランス国籍となり、日本に戻らなかつたことが思い浮かぶが、画家の全体像は、ごく最近まで結ばれない状況が続いていた。画期的であったのは、2006年に開催された「生誕120年 藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人」(東京国立近代美術館ほか)であり、藤田の全画業を見る機会に恵まれた。その後も2008年から09年には「没後40年 レオナール・フジタ展」(北海道立近代美術館ほか)が開催され、1928年の大作《構図》《争闘》や、「平和の聖母」礼拝堂を始めとした晩年の作品が紹介された。本年では、ポーラ美術館の藤田をもとにした展覧会が開催されるなど、作品をまとめて見る機会が多い。

当館で開催する展覧会は、戦前にパリで評価され、のちに日本に戻り、戦後はパリに行った起伏ある人生のなかで、パリへの留学から、パリで評価されるまでの、画業の最初の部分を大きく取り上げる。2006年や2008-09年の展覧会に展示されていない作品も含んでいる。作品のほかに、



図版1:1927年、パリでの藤田とユキ ©Courtesy Archives Artistiques, Paris 2013



図版3:秋田県立美術館における《秋田の行事》と《大地》展示風景。  
(本展覧会には出品されません。)



図版2:北九州市立美術館(8月31日-10月20日)での本展展示風景。[提供:北九州市立美術館]

藤田が留学する前に結婚した、最初の夫人とみへの手紙を、今回出品していて、展覧会の見どころとなっている。

留学して間もない頃、アンリ・ルソーなどの影響を受けながら、1920年代初頭に独自の作風を生み出すまでの歩みをたどるところが興味深い。裸婦像など西洋美術の伝統をふまえながら、日本の面相筆などを駆使して墨線を描き、油絵具で色彩を施している。下地の乳白色は絵画制作の秘密に迫るものであるが、藤田は生前に口外していなかった。近年は修復現場の報告からタルクという材料が画面に含まれることが分かった。また藤田の制作現場を撮影した土門拳の写真から、タルクを含む『シッカロール』(ベビーパウダー)を使用していたことが分かった。今回の展覧会でも出品作から、藤田の技法の秘密に迫ることができる。この展覧会は6つの会場を巡回している(図版2)が、当館が最後の会場である。

この展覧会で取り上げる1931年以降、日本に戻ってから、藤田の最大の支援者になるのが、秋田の平野政吉である。平野が依頼した大作《秋田の行事》(1937、公益財団法人平野政吉美術財団)は、現在秋田県立美術館にあるが、本年9月28日から11月10日に開催された、同館の『壁画《秋田の行事》からのメッセージ 藤田嗣治の1930年代』では、《秋田の行事》とブラジル珈琲販売宣伝本部の壁画《大地》(1934、公益財団法人ウッドワン美術館)を、比較しながら見ることができた(図版3)。エコール・ド・パリから壁画、戦争画に至る画業がわかる。また当館展覧会に展示される《横たわる裸婦(夢)》(1925、国立国際美術館)との関連が考えられる、3点の作品が初めてまとめて紹介された。

2006年と2008-09年の全貌展以後、当館で開催する展覧会を含めて、多くの機会で藤田の作品を見ることができるようになった。また画集で図版を見ることも容易になった(図版4)。個々の作品がもつ面白さ、長期間にわたる藤田の画業の多彩さを、展覧会から感じ取っていただければ幸いである。

日本とフランスの文化交流を紹介する特別展 第2弾  
「藤田嗣治渡仏100周年記念 レオナール・フジタとパリ 1913-1931」  
会期:2014年2月21日(金)-4月6日(日) ※月曜休館



図版4:本展覧会図録(2,300円)

## フランス印象派の陶磁器 1866-1886 ジャポニスムの成熟

福富幸(主任学芸員)



《ルソー》シリーズ テーブルセッティング

2013年から2014年にかけて、当館では日本とフランスの文化交流を紹介するふたつの特別展を開催します。ひとつは「フランス印象派の陶磁器 1866-1886 ジャポニスムの成熟」展、もうひとつは「藤田嗣治渡仏100周年記念 レオナール・フジタとパリ 1913-1931」展です。ふたつの展覧会がカバーするのは、19世紀後半から20世紀初頭、日本では幕末から明治、大正、昭和初期までの70年にも満たない短い時代です。東西の美術が互いにキャッチボールを繰り返し、めまぐるしく変化しているところが面白く、またフランス人を魅了した日本の美意識にもあらためて気づかされることでしょう。フジタ展の詳細は廣瀬学芸員の解説に委ね、印象派の陶磁器展について少しお話します。

「フランス印象派」といえば、日本では人気の高いモネやピサロ、ルノワールといった画家たちがすぐ思い浮かぶと思います。1872年、モネが有名な「印象、日の出」を描いた、まさにこの年、フランスの製磁会社アビランドはパリに工場を開設し、印象派の画家ブラックモンを美術監督に迎え、印象派スタイルの陶磁器制作を始めました。このたびの展覧会は、このアビランド社の創業者の一族に残る当時の作品をご紹介するものです。

ブラックモンは日本美術の影響を最初に受けた画家と言われます。アビランド社に招かれるより以前、彼が「北斎漫画」などからモチーフを取り入れ、デザインした食器セット《ルソー》シリーズは、1867年パリ万博に出品され、好評を博しました。印象派の画家たちが絵画の中に日本の浮世絵や着物をきた婦人像を描きこんだように、



《パリジャン》シリーズ 皿「雪」1876年頃

陶磁器の世界においても、最初は浮世絵や蒔絵などからモチーフをそのまま借用したものでした。また、ヨーロッパ人には「行き当たりばったりに散りばめられた」ように見えたモチーフのアランダムな配置も、自然の移ろいゆく時間、不定形な「雨」や「雪」「風」を描くということ、北斎や広重らの版画、海外に渡った日本美術の影響と言われています。これらの作品は、洋食器であります。実物を知らずに写しているので、少しおかしなこともあります。

アビランド社には多くの装飾図案家が参画しましたが、エルネスト・シャプレが加わったことにより、泥しよう(スリップ)を使った装飾陶器“バルボティース”が生まれました。“バルボティース”は、まるで印象派の画家たちが絵を描くように絵付けされた“印象派の陶磁器”と呼ばれるものです。当館では、国内に収蔵される印象派絵画とともに展覧しますので、主題や表現、テクスチャーの類似がよくわかると思います。

やがて日本美術や印象派絵画を取り入れ、消化し、自然のあるがままの姿をより美しく器に配するようになった陶磁器は、次の時代、アール・ヌーボーへと花開きます。ご承知のように1900年のパリ万博はアール・ヌーボー色となり、そしてそのアール・ヌーボーの影響を日本の近代美術やデザインの中に見ることができます。さまざまに連想を働かせながら本展をお楽しみいただければと思います。

## “絵画する”ふたりの出会い

吉川 文子(学芸員)

当館2階展示室では、ただ今「第三回 I 氏賞受賞作家展 松井えり菜 児玉知己」を開催しています。岡山県新進美術家育成「I 氏賞」の受賞者を紹介する展覧会は、2010年度「ふたつのセンス 大西伸明と杉浦慶太 存在と不在」、2011年度「あたらしかたちをもとめて 上西竜二 川埜龍三 甲田千晴 佐故龍平」に続く三度目の企画となります。このたびは、第3回大賞の松井えり菜、第4回大賞の児玉知己による絵画の共演。作品の魅力は会場で感じていただきたいので、ここではふたりの作家の横顔に少しだけ触れてみましょう。

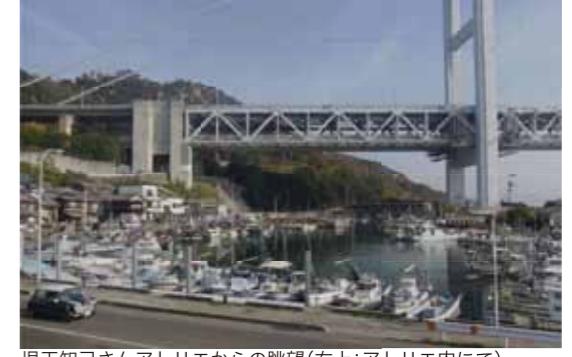
松井えり菜さんは、1984年岡山県倉敷市生まれ。東京を拠点に、教鞭をとる京都、地元倉敷を忙しく行き来しながら、海外にも活躍の場を拓げています。一貫して制作を続けている自画像も、彼女とともにスケールや輝きを増しているようです。写真左は新作《地球の中心で、愛を叫ぶ》の制作風景。手もとに並ぶ可愛いモチーフたちは作品の中にも登場します。1982年倉敷市生まれの児玉知己さんのアトリエは、瀬戸大橋のたもと…かつて漁師の集会所だった港沿いの建物です。職業人、家庭人としての穏やかな日々に、埋もれることなく問い合わせてきた内なる感覚は、のびやかな描線と色彩の重なりの奥で、彼を包むやうな自然と響き合っています。まとまった形での作品発表は3年ぶり、受賞後の展開にご注目ください。

作風も活動スタイルも異なるそれぞれの良さを、ひとつの展覧会で伝えられるのか不安もありましたが、いつも和やかに相手の立場を思いやるふたりの心ばせにすいぶん助けられました。受賞年度による偶然の出会いに触発され、静かなライバル心も燃やしつつ、表現者として認め合い制作に励む姿に、現在進行形の絵画のもつ可能性を改めて実感しています。

本展の副題「ふたりは“絵画する”」は、選考委員として彼らの審査に携わり、その後の活動を見守ってきた鍵岡正謹館長の考案によるものです。「I 氏賞」では、これまでに大賞6名、奨励賞12名が賞を受け、今年度も書類審査を通過した12名の候補者の中から新たな受賞者の選考が行われます(「第7回 I 氏賞選考作品展」会場:岡山県天神山文化プラザ 2014年1月28日-2月9日)。受賞の数年後に、若手作家の成長ぶりをご覧いただけることも、本賞の楽しみのひとつです。新たな年のはじまりに、松井さん、児玉さん、さらに続く若い世代の瑞々しい表現を、ぜひ皆さん的眼で確かめてみて下さい。



松井えり菜さんアトリエ風景(中上:パレットとモチーフ)



児玉知己さんアトリエからの眺望(右上:アトリエ内にて)

## 新収蔵品紹介

### File 02

岡本豊彦と柴田是真  
中村麻里子(主任学芸員)



昨年度に購入し、館蔵品となった作品2点を紹介する。

まず作品1.岡本豊彦(1773-1845)筆《山水図》について。豊彦は備中国窪屋郡水江村の岡本清左衛門行義の庶子として生まれた。名は豊彦、字は子彦、号は鯉喬・丹岳・蘿村。幼い頃より、玉島の画人黒田綾山(1755-1814)に師事し画を学んだ。寛政3年(1791)、19歳頃に綾山の師で池大雅門下の福原五岳(1730-1799)に南画を学ぶ。25歳頃豊彦は京都へ移り、呉春(1752-1811)門下で四条派を学ぶ。同門に松村景文、柴田義董、小田海僊などがいた。呉春の没後は画塾「澄神社」を開き、多くの弟子を育成した。門下からは、塩川文麟、柴田是真、田中日華などが輩出し、その画系が近代京都日本画壇の主流を占めることになる。

本図左の款記によると、まず画は「己酉春丹岳」「豊彦」白文朱文連方印)より、寛政元年(己酉・1789)豊彦17歳の時に描いた作品であることがわかる。その上に以下の款記がある。

「美濃唯頓寺上人携一軸來質之予／迺披卷觀之予十七歲所作也嗚呼／歲月既邁事物非昔不能愴然因／題數字之 文政庚辰夏五 岡豊彦」(白文方印「豊彦」)

これより、文政3年(1820)豊彦48歳当時、唯頓寺(岐阜県大垣市深池町)上人が、自分が17歳の時に描いた山水の掛軸を携えてきた旨を追記している。現住職の臼井元成氏によると、文中の「唯頓寺上人」とは第13代住職轉隨であろうとのこと。「丹岳」は豊彦が若い頃に使用した号



1 岡本豊彦《山水図》寛政元年(1789)  
2 岡本豊彦《山水図》賛部分  
3 柴田是真《桃太郎図》19世紀 江戸時代

で、福原五岳の岳の字を使っている。地理学者古川古松軒(1726-1807)の肖像画が知られるが、豊彦15-16歳頃の作品として、ごく若い頃から実力を發揮していたようだ。本図には後の伸びやかな筆致はまだ見受けられないものの、山水画を学習する真摯な姿が伺える。当館には豊彦円熟期の屏風5点をはじめ、代表作が集まっている。四条派の瀟洒で温かな花鳥山水で知られる豊彦であるが、若描きの本図が館蔵品となったおかげで豊彦がぐんと身近になった気がする。

一方作品3は、柴田是真(1807-91)筆《桃太郎図》。江戸生まれのは是真は、11歳で吉満寛哉に蒔絵を学び、16歳で鈴木南嶺に画を学ぶ。天保元年(1830)24歳の時、京都へ遊学し、四条派の画家として名を馳せていた岡本豊彦の弟子となる。27歳の時に江戸に帰ったため、短い期間ではあったが是真は豊彦に学んだ。幕末には江戸随一の漆工家として知られ、明治時代には、内国勧業博覧会などに出品し、博覧会の審査員をつとめるなどした。近代の漆工界をリードした是真だが、画家としての知名度も高い。豊彦に学んだ是真が、岡山県の伝説として広く知られる「桃太郎」をテーマにした画であるという、当館にとって嬉しい作品である。桃太郎の同図様の先行作品はいくつかあるが、本図では桃太郎の背後に隠れるような猿と雉、家来にならんとする平伏姿勢の犬の三者と、桃太郎の威圧的表情との対比が面白い。

## 展覧会スケジュール

12月  
December

12月13日|金|—2014年1月19日|日|

**【岡山の美術展】**  
**第三回I氏賞受賞作家展**  
**松井えり菜 児玉知己 ふたりは“絵画する”**

展覧会期間中、当館学芸員による  
ギャラリートークや美術館講座など  
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。  
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

1月  
January

12月20日|金|—2014年2月2日|日|

**【特別展】**  
**フランス印象派の陶磁器 1866-1886**  
**ジャポニズムの成熟**

ピサロやモネ、印象派の画家たちが活躍し始めた頃、陶芸においても浮世絵や印象派の絵画を手本とし、新しいデザインや色彩、テクスチャーを求める動きがありました。それらは後に「印象派の陶磁器」として高く評価されました。本展はフランス・アビランド社のコレクションから日本初公開を多数含む陶磁器約160点と北斎版画など関連する資料類約30点を展覧します。また、当館では特別にこれらの陶磁器に多大な影響を与えた印象派の絵画とともにをお楽しみいただきます。

1月5日|日| 14:00～15:30  
**G T 「児玉知己ギャラリートーク」**  
講師 児玉知己(I氏賞受賞作家出品作家)  
会場 2階展示室 ※要観覧券

2月  
February

1月11日|土| 13:30～15:30  
**記念講演会 「器が語る食文化—テーブル  
コーディネートの視点から—」**  
講師 木村ふみ氏(食環境プロデューサー)  
会場 2階ホール(先着210名)

3月  
March

2月22日|土| 14:00～15:30  
**記念講演会 「フジタ芸術誕生の物語  
—美の系譜を泳ぐ」**  
講師 村上哲氏(熊本県立美術館学芸課主幹・日本側監修者)  
会場 2階ホール(先着210名)

2014年2月21日|金|—4月6日|日|

**【特別展】**  
**藤田嗣治渡仏100周年記念**  
**レオナール・フジタとパリ 1913-1931**

藤田嗣治(レオナール・フジタ、1886-1968)は、東京美術学校を卒業後、1913年に渡仏し、「エコール・ド・パリ」の代表的な画家として活躍しました。裸婦に代表される「乳白色の肌」は、同地の画壇で評価されました。この展覧会では、これまで日本に紹介されなかった、フランスにおける個人所蔵の作品、ならびに日仏両国における美術館所蔵の作品などを通じて、独自の絵画が評価されるまでの道のりを紹介します。